

続きではないが、先週と同じイザヤ書とヨハネの手紙一から。耳を柔らかくして御言葉に聞こう。

「草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい(イザヤ40:7)。

主の風(霊・息)によって人間は命を得(創世2:7)、その風に吹かれて枯れ、萎む。どんなに輝かしい成果も、天にも達するほどの文明も(11:4)、主の霊が吹いて、枯れ、萎む。世のすべてがそう生成変化している。

「草は枯れ、花はしぼむが、わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ(イザヤ40:8)」。読んで通り越してしまいそうだが、腰をおろしてこの預言を丁寧に味わおう。

やがて枯れて萎む私たちは確かに、草に等しい。が、同時に「わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ」。逆に言えば、私たちとは、永遠の言葉をもつ「神の僕」。

「しぼむが」の「が」、「しかし」という転換点となる言葉に注目したい。

命を与えてくれる主の霊(風)に吹かれて、私たちの命は取り去られる(40:7)。「しかし」、「私たちの」神の言葉は永遠だ。枯れて萎む私という存在は、「しかし」で、永遠なる神の言葉につながられている。

私たちはもう幾度も、枯れて萎んでいく人間の生涯を目の当たりにしている。ところが、「しかし」によって結びついた「私たちの」神の永遠は、永遠であるがゆえに、認知も判断も想像も届きえない。

とはいえ、熱狂的な宗教心で「神の永遠」を喧伝するあまり、枯れて萎んでいく現実を軽く扱ってはならぬ。世にある日常を蔑ろにしてはならぬ。

「しかし」の後に来る不可知な永遠に、やがて招き入れられるにしても、聖霊がもたらす草に等しい私たちの日々(40:7)もまた、尊い真実なのだから。

「世も世にある欲も、過ぎ去っていく。しかし、神の御心を行う人は永遠に生き続ける(1ヨハネ2:17)。

永遠の命は「行う人」という条件付きではない。実際には、神の御心の境目や、行いの程度や、合格か失格かの分岐点など分かりはしないのだから。

では「神の御心を行う人」とはどういう者なのか。

「なぜなら、すべて世にあるもの、肉欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出ているから(2:16)」。肉欲、目の欲とは大袈裟だが、人間を惑わすあらゆる幻想、とでも言えようか。

己が枯れる草であり、萎む花であることをひしと自覚し、世の栄華や誘惑に取り込まれないこと。一人の枯れる草として、一人の萎む花として、今ここで、神の永遠を生きる。これが「神の御心を行う者」ではないのか。生きて神の永遠性に接する者は、枯れて萎んでいく現実を愛おしみ、慈しむ。

「しかし、神の御心を行う人は永遠に生き続ける(2:17)」。人は「しかし」によって永遠とつながる。過ぎ去っていく世や世の欲のただ中にありながら、取り込まれず、「しかし」に続く永遠に触れる。

キリスト者は、無償なる神の愛を心身に覚え、世のどんな状況にあっても「しかし」を手放さない。

「いまだかつて神を見た者はいない。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださる(4:12)。

草に等しい者に永遠の神は見えようがないが、神に愛されている(4:10)現実を分かち合うことはできる(教会において)。その愛の響き合いで私たちは永遠の命に与る(2:17)。

永遠をずっしり抱えるほどに、草に等しい現実がかけがえないものになる。「しかし」を支点として。



#### 《おまけのひとつ》

神の永遠 草のような現実と比べたらずっと重いだろう でも支点からの腕の距離は 永遠側より 現実側の方が長い 天秤を思い浮かべてほしい 方や鉄 方や綿だが それなりに吊りあっている